

## ねがいのいえニュース 第70号

社会福祉法人ねがいの杜 広報紙・2024年7月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0046 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp http://www.negainoie.com



昨年の酷暑を思い出させる日が続くこの頃、障害のある方、高齢の方、幼いお子さんたち、そして、今も苦難が続く被災地のみなさま、ご無事でお過ごしでしょうか？

ねがいの杜は、昨年開所した生活介護ハナミズキが4月から利用者倍増、5月から5軒目となるグループホームもスタートし、新人スタッフを育成しながらの運営に目まぐるしく追われる3ヶ月でした。

### 能登からの報告

医療的ケア児支援法ができて3年、医ケアに関わる研修会が多数開催されるようになった昨今、能登の医ケア児支援も迅速でした。複数のネットワークから現地の状況を報告する研修会が開かれ、発災直後からの様子を知ることができました。

驚くべきことに、全国の名だたる支援者がチームを編成して現地に到着した時には、医ケア児はすでに避難が完了し安全な地域に逃れていたという話でした。なぜそんなことができたのか？それは、東日本大震災が起きたあとから、地域が一体となって災害について検討を始め、備品や薬、電源の確保などを準備し、合同避難訓練や、安全な地域への護送訓練をしてきたからだと言っていました。

それは、息をのむほどの素晴らしさです。今、自分の地域で災害が起きた時、災害弱者や生活困窮者を守る体制を自分たちは持っていません。これからの課題であり、先駆者から学ぶことは大きいと感じます。

また、「ごちゃまぜ」で有名な仏子園の取り組みもTVで報道されていました。障害のある人もない人も、高齢者も子どもも、みんなが集まり生まれるにぎわいの中で楽しげに暮らす共生福祉は、数年前から脚光を浴びていました。その仏子園が、発災直後から被災者支援の拠点となっていたことは新聞等の報道で目にしていました。

今回の放送では、就労支援施設である温泉やレストランが、被災後の一時休止からいち早く再開に至り、地域住民に入浴と癒しの場を提供していました。そして入浴後にビールを飲みながら住民が語り合い、かたわらで幼い子どもたちが遊んだり宿題をするのを大人たちが見守るその場には、大きな笑い声が響いていました。単に物資や仮設住宅を供給する支援では生まれ

ない、自然に人が集まり、つながりを生み、喜びがあふれる「ごちゃまぜ」のシステムは、災害のあとに必ず起きる孤立死の問題までも解決するメソッドです。

インタビューに答える理事長は、

「被災した時に逃げる避難所にはいろんな人が集まり、そこはごちゃまぜの世界。仏子園はふだんからごちゃまぜだから、いつもとあまり変わらなかった」

「ごちゃまぜはいつもトラブルだらけなので、トラブルに耐性がある」と語られていました。なるほど、いいことばかりではないが、真の強さとはその中で共生できることなのだろう、と感嘆します。

「温泉から上がって飲食し会話すれば、知り合いが増え、つながりが生まれる。ただハコがあればいいわけではない。そこにはきっかけが必要」と、被災地のコミュニティ作りについて、目の覚めるような提案をされていました。全ての政治家と福祉家が目指すべき地平です。



### 待機障害者をなくすために

ねがいの杜の新しいグループホームげんきそうが5月よりオープンし、毎晩の宿泊利用者は40名になりました。ねがいのいえと子どもの時に出会い、その成長に伴走支援してきた50名の利用者のホームを実現するとみなさまに約束してきた目標は、残すところあと1軒です。強度行動障害や医療的ケアのある方を受け入れてくれるホームがない、ということが大きな問題になっている報道を目にするたびに、ねがいの杜だけ日本社会から独立しているようにさえ感じます。

強度行動障害の方を夜間支援するのは確かに楽勝なことではありません。しかし、誰にもできないほど困難なことかと言えば、そんなことはない、と私たちは考えます。全く面識のない、関係性ができていない方を受け入れるのが困難であるのは否定しません。しかし私たちは、そんな無理はしていません。出会った人を支えよう、関係性を構築した上で、自分たちのメソッドで長く支援してきた人と暮らそう、と訴えています。

そしてそれを、ある日突然、家族から離れたら二度と帰れなくなるのではなく、まずショートステイを利用して、月に一回の泊りから始め、週に一回、二回、と時間をかけて慣らしていこう、と訴えています。ふだんから慣れたスタッフが一緒に泊まってあげれば、多くの方が落ち着いて眠ります。

そのように時間をかけて準備をすれば、ほとんどの方が家族から離れる生活に問題なく移行することが可能です。強度行動障害者のホームは難しいと言う多くの方が、そのような段階的な取り組みを試してはいないことでしょう。そしてそれが実行できるのは、ふだんから関わりを重ねている支援者、つまり、就労支援や生活介護や放課後デイ、等の事業者です。

出会った利用者へホームまで提供できない場合、みな、いつかどこかの施設へ行くことになり、事業所にとっては欠員となることでしょう。事業所が充足している地域では、新しい利用

者はなかなか入って来てくれない昨今、退所は定員割れ、ひいては事業所の閉鎖につながります。今、通ってくださっている利用者は、事業所にとっても生き残りを左右する大事な顧客なのだという意識を持つべきです。そして利用者にとっては、この事業所に通っていれば生涯支えてもらえる、という安心感を持つことができます。医療者を雇用すれば実施できる医療的ケアの支援は、もっと容易であると感じます。

待機児童問題が社会の注目を集めたのを機に、国は保育園の整備に注力し、数年で待機児童の解消に至りました。今は待機児童が問題になっています。しかし福祉の世界では、高齢のご家族から重度障害のお子さんを引き受けられる施設の不足が続きます。この「待機障害者」の問題を解決するために、全ての事業者が、出会った人の生涯を支えたと決めて欲しい、そうしたら、全てのご家族が抱える「将来の不安」という永遠の課題も解決するでしょう。それが、ねがいの杜の願いであり、その想いを共有できる仲間がいたなら、あらゆるサポートを厭いません。



## ある夜の対応

他の事業所では断られてねがいの杜を頼って来られた方が多い中で、最も大変な行動障害を抱えるりえさんは、これまでも度々エピソードを紹介してきた。グループホーム入居までのおよそ7年間を、週2回のショートステイと、生活介護のあと外出して夕食後に帰宅する移動支援を週2回実施することで、家庭での生活を乗り越えて、最重度棟のしあわせそうへ入居され5年が経った。

ショートステイから始めてこの12年の中で、一晩中暴れた夜が数回あり、そんな日はスタッフ2人がかりで朝まで対応した。私たちの実践する心のケアは、強い薬を必要とすることなく、朝には穏やかなりえさんに戻る、という支援を繰り返してきた。そんな夜も今は年に1回あるかどうか、という頻度まで激減した。

いつその日が訪れるかわからないため、毎日が手厚い厳戒体制であるが、ほとんどが穏やかな夜を過ごし、スタッフは一見、暇そうにも見える。が、ひとたびスイッチが入れば現場は緊張感が走り、他の利用者をそれぞれの部屋に誘導し、リビングからテーブルとイスを片づけて安全を確保する。

その日がやってきた先日、生活介護で日中からすでに不穏だったと報告が入り、ホームで受け入れるスタッフが準備を整えて迎え入れた。りえさんのために設計したしあわせそうは、不穏な時に歩き続けられるよう広いリビングを配置した。両脇にふたりのスタッフがつき歩き続ける。しかし、2年前から見られるようになった、ジャンプして後頭部から落下するこだわりが始まると、その行為を止めなければならない。それにはスタッフ4人がかりとなる。行動障害の方たちはジムでトレーニングなどしていないのに、その筋力は強靱で、スタミナは無尽蔵である。全身に力がこもり、脈拍は速く、落ち着くのは困難な様子が寄り添うスタッフの体に伝播する。

朝から出勤していた日勤者たちが定時をとくに過ぎたが、残ることを早々に決め、ローテーションを組んで交代で休憩する。夜勤者2名は深夜に備え体力温存のため、他の利用者の見守りに専念する。女性スタッフだけでは止めきれないため、別のホームで遅番の手伝いを終えた男性スタッフが駆けつける。深夜0時まで4人体制で付き添い続け、りえさん自身に疲れと落ち着きが戻ってきて、自室に入ることができた。そこからは女性スタッフで対応できると判断し、男性スタッフは翌日の勤務のため帰宅する。

その後、何度か自室とリビングの出入りを繰り返しながら、3時過ぎから横になりうとうとした。日勤から来ていたスタッフは結局、何かあれば手伝います、と言って朝まで残ってくれた。

どんなに重度な人でも地域で暮らせます、と訴えているねがいの杜だが、実際には楽々こなしているわけではない。そんな日はスタッフの総力を結集してこんな対応をしているというのが現実である。もちろんそれはサービス残業ではない。超過勤務に対して法定通りの残業代を支給する。重度支援に高く設定された介護報酬をもらっても、経営はぎりぎりのラインで、スタッフの収入はやっと介護業界の平均レベルである。しかし、突然やってくるその日に、協力してくれるスタッフたちは、誰ひとりそれを厭わない。進んで居残りを決断してくれる。それがこの法人の強さである。

朝には落ち着きを取り戻したりえさんが、日中はねがいの杜の生活介護やじろべえに通所する。夜間はその日以来、ほぼ静かな毎日を送ったが、日中活動ではその後も不穏な気配が続き、穏やかな笑顔が戻ったのは3週間後だった。今回は長いトンネルだったが、日中支援と夜間支援のスタッフがそれぞれに、りえさんの苦しみに寄り添い続けた結晶である。

## ストレスカップの心理学

障害福祉界を席卷する構造化の波には乗らないねがいの杜の関わりで、なぜ行動障害の方が落ち着きを取り戻すのか？様々なメソッドは駆使しているが、根底に流れるのは、思い通りに行動できない方たちの苦しみを理解する支援員の優しさが、心をほぐし、ストレスのメーターを減弱させているのだと考えられる。

心理学では、人は誰もが心の中にストレスを満たすカップを持っていて、ストレス量が少ないうちは許容量が大きく耐性が高いが、その量が表面張力いっぱいになったところへ次の一滴が加えられると、一気にあふれ出すというストレスカップの考え方がある。

いつも緊張感でいっぱいの行動障害の方たちは、常にストレスカップがいっぱいに近く、少しの刺激でパニックを起こしやすいが、日頃から癒しの関わりを積み重ねるねがいの杜の支援は、そのストレス量を絶えず軽減する方向に作用する。



ある日の会議で、こだわりが強く不穏が続く自閉症の方へ、「いろいろやってるんだけど、なかなか落ち着かない」と語ったスタッフに、感銘を受けた。長年の苦しみを一日で癒す魔法は存在しない。「いろいろやっている」と言える日常の積み重ねこそが、素晴らしいのである。